

平成27年産「アルプス米」コシヒカリ栽培こよみ (JA米)

アルプス農業協同組合
アルプス農協管内農業技術者協議会

品質向上は異常気象に打ち勝つ「土づくり」から

高品質なアルプス米につなげる6つのポイント

- 土づくりの徹底
- 初期茎数の確保
- 穂揃期の葉色確保
- 適期で適正な防除の徹底
- 水管理の徹底
- 適期収穫

より良い農業 (GAP) をめざして

次のことを常に意識し農作業等を行きましょう。

- 農薬の飛散を防止しましょう。
- 散布濃度・量を守りましょう。
- 余裕をもった計画的な作業をしましょう。
- 農業機械の点検と整備をしましょう。
- 農業機械の操作手順を確認しましょう。

収量構成の目安 (540g/10a)

収量構成	目安
㎡当たり穂数(本)	400
1穂着粒数(粒)	70
㎡当たり着粒数(粒)	28,000
登熟歩合(%)	87
玄米千粒重(g)	22.5

青メシ	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月		
	育苗期	5/15 田植	活着期	有効分けつ期	無効分けつ期	7/14 幼穂形成期	8/5 穂ばらみ期	登熟期	9/11 成熟期

土づくり

- 稲わらの腐熟促進のため、秋耕しを行い、排水溝を掘る。
- 珪酸質材や堆肥を施用する。
- 19mmのふるい目を使用し、選別を徹底する。
- 水分14.5%に仕上げる。
- 適正な乾燥調製
- 粉質化率85~90%頃に刈り取る。

適正な乾調製

刈取時期判定の目安
移り熟で刈取時期を判定
株内の平均的乾燥率をみる
(乾燥化率85~90%)
青穂内の2次長穂が黄化した時

適正な水管理

- 生育ステージに合わせて防除を実施する。
- 刈取り予定日の5~7日前まで間断かん水を行う。
- フェーン時はあらかじめ入水する。

出穂後20日間の湛水管理

- 葉色が濃い場合は、出穂前に追加施肥を施す。
- 1回目肥は1回目穂肥から1週間後を目安に施用する。
- 1回目穂肥は葉色と幼穂長15cmを確認してから施用する。

防除の底

- 2回目穂肥期
- 1回目は穂肥期

草刈りの徹底

- 幼穂形成期から飽水管理
- 7月上旬までに畦畔や雑草地の草刈りを終える。
- 1回目穂肥は、1.5mを必ず幼穂長に確認してから!

中干しは適期に開始

- 強弱の中干しに注意する。
- 田植後1か月後頃を目安に開始する。
- 5m以上1本を目安に溝を掘る。
- 6~20頃にエースイ加里うくまたは珪酸加里を施用する。
- 中干し後は幼穂形成期まで間断かん水を行う。

溝掘りは確実に

- 活着後は、浅水管理をする。
- 植付本数は株当たり3~4本。
- 植付本数は株当たり3~4本。
- 栽培密度は原則坪当たり20株を確保。
- 苗播施による防除を実施する。
- 基肥は基準量を確保する。

田植えは15日を中心に

- 田植え時期に応じた計画的な育苗を行う。

健康育成

- 代かきから、均等に努め、硬りすぎに注意する。
- ゆつゆつと耕起し、作業土は15cm以上確保する。
- 秋施用ができた場合は堆肥を、土壌の資材を確実に施用する。

耕起・代かき

作業日程の目安

水管理の目安

- ①生育初期の浅水管理
- ②中干しは遅れずに
- ③中干し後の間断かん水
- ④幼穂形成期後の飽水管理
- ⑤登熟期間の水管理

- ・出穂後20日間の湛水管理
- ・収穫5~7日前までの間断かん水

水管理の方法

3cm程度入水後→自然減水→入水(出穂後の頃まで繰り返す)

水管理の効果

①根が常に水分吸収可能な状態を維持することで急激な葉色低下を防ぐ
②肥料効果を良好にする

きめ細かな水管理
~初期茎数の確保~

溝掘り・中干し
~適期に遅れず~

間断かん水
~酸素と水の供給~

飽水管理
~急激な葉色低下を防ぐ~

出穂後20日間の湛水管理
~穂体の活力維持~

間断かん水
~品質の向上~

除草剤散布は遅れずに

雑草防除体系

●軟弱苗には使用を避ける。●除草剤散布後7日間は落水やかけ流しはしない。

移殖当日	移殖後1日	移殖後2日	移殖後3日	移殖後4日	移殖後5日	移殖後6日	移殖後7日	移殖後8日	移殖後9日	移殖後10日	移殖後11日	移殖後12日	移殖後13日	移殖後14日	移殖後15日	移殖後16日	移殖後17日	移殖後18日	移殖後19日	移殖後20日	移殖後21日	移殖後22日	移殖後23日	移殖後24日	移殖後25日	移殖後26日	移殖後27日	移殖後28日	移殖後29日	移殖後30日
初期	メテオフロアブル 500ml/10a (移殖時~移殖後5日まで)	メテオ1キ口粒剤 1kg/10a (移殖時~移殖後5日まで)	マッシュアップ1キ口粒剤 1kg/10a (移殖後3~5日まで)	ビッグシュアエース1キ口粒剤 1kg/10a (移殖時~移殖後5日まで)	サブラッドFRXフロアブル 500ml/10a (移殖後~ノビE2.0葉期まで)	ブラストワンジャンボ 500g/10a (移殖後3日~ノビE2.0葉期まで)	アピロトップMX1キ口粒剤 51kg/10a (移殖後7日~ノビE3.0葉期まで)	アピロトップMX1キ口粒剤 51kg/10a (移殖後3日~12日)	中期	ファイゴールSM1キ口粒剤 1kg/10a (移殖後20~30日/ノビE3.5葉期まで)	サンバッチ1キ口粒剤 1kg/10a (移殖後20日~ノビE3.0葉期まで)	雑草が残った場合	○フォロアップ1キ口粒剤 (ヒエ・広葉雑草) 1kg/10a 移殖後25日~ノビE5.0葉期まで (但し、収穫60日前まで)	○バサガン粒剤 (広葉雑草) 3~4kg/10a 落水散布 移殖後15~50日 (但し、収穫60日前まで)	○クリンチャー1キ口粒剤 (ヒエのみ) 1.0kg/10a 移殖後7日~ノビE4.0葉期まで	1.5kg/10a 移殖後25日~ノビE5.0葉期まで (但し、収穫30日前まで)	○ヒエクリーン1キ口粒剤 (ヒエのみ) 1kg/10a 移殖後15日~ノビE4.0葉期まで (但し、収穫45日前まで)													

初期除草剤の適正使用

- ①代かきから田植えまでの日数を長くしすぎない。
- ②軟弱苗の使用や極端な浅水管理を避け、適切な水管理を行う。
- ③葉害軽減のため、初期除草剤マッシュアップ1キ口粒剤は移殖後3日以降の使用とする。

- 田植同時除草剤は、移殖と同時に施薬するため薬害を受けやすいことから、上記①を守り、田植後の入水をゆるやかに行う。

適期に適正な農薬使用で安全・安心な米づくり

病害虫防除体系

苗箱施薬 ※対象病害虫の()内は移殖当日のみ登録あり

播種時~移殖当日	緑化期~移殖当日
農業名: ルーチンアドスピノ箱粒剤 50g/箱	農業名: Dr.オリゼフェルテラ粒剤 50g/箱
対象: いもち病、イネミズウムシ、イネドロオウムシ、ツマグロヨコバイ、ニカメイチュウ、ウツカ、フタオビコヤガ、白葉枯病	対象: いもち病、イネミズウムシ、イネドロオウムシ、イチュウ、フタオビコヤガ、ツマグロヨコバイ (白葉枯病)

本田防除 ●防除間隔は7日を目安に (間隔が長ならないように注意)

出穂前(随時)	穂揃期	傾熟期
粉剤: ブラシン(リダ)粉剤DL 4kg/10a (収穫14日前まで)	ラプサイドフロアブル粉剤DL 4kg/10a (収穫14日前まで)	スタークル粉剤DL 3kg/10a (収穫7日前まで)
液剤: ブラシン(リダ)フロアブル 1000倍 150g/10a (収穫14日前まで)	ラプサイドフロアブル 1000~1500倍 150g/10a (収穫14日前まで)	スタークル液剤10 1000倍 150g/10a (収穫7日前まで)
対象病害虫: いもち病、紋枯病、こま葉枯病、穂枯れ、疑似紋枯病	対象病害虫: いもち病、カメムシ類、ウツカ類	対象病害虫: カメムシ類、ウツカ類、ツマグロヨコバイ

●前年にいもち病、紋枯病が発生した常発地等では出穂前防除が必要です。

品質向上は「土づくり」から

土づくり資材の施用基準

資材名	標準施用量(kg/10a)
粒状ケイカル	200
元気(新)	100
シリカロマン	100
シンキョーライTP	100

深耕しの実施

現状+3cmで15cm以上作土層の確保

土壌に応じた適正な施肥量

5/15植え「コシヒカリ」施肥基準

※側条施肥の場合

土壌区分	肥効調節型肥料 (基肥一発体系)		分施肥体系	
	肥料名	施用量(kg/10a)	肥料名	施用量(kg/10a)
砂壤土	LPss コシヒカリ1号	35	BB基肥206 または 燐加安403	32 28
	LPss コシヒカリ2号	30	BB基肥206 または 燐加安403	25 22
壤土・黒ボク	LPss コシヒカリ1号	35	BB基肥206 または 燐加安403	32 28
	LPss コシヒカリ2号	27	BB基肥206 または 燐加安403	22 20

生育量を確保するために、基肥量はしっかりと施用する。

◎高品位・低コスト生産に カントリーエレベーターを積極的に利用しましょう!